

特別講演Ⅱ

座長：堀江 重郎（順天堂大学）

痛みに対する漢方薬の応用

昭和大学医学部 生理学講座 生体制御部門

砂川 正隆

痛みが慢性化すると中枢神経系において可塑的な変化が生じることで病態が複雑化し、一般的な鎮痛剤では治療に難渋することが少なくない。慢性痛の治療では、痛み以外にもストレス、不安、不眠症状などに対するケアも必要である。このような時に使える漢方薬の一つが「抑肝散」である。漢方薬は2種以上の生薬から構成される多成分系であり、複数の症状に対しても同時に対応することができる点が面白い。抑肝散は鎮痛作用、抗ストレス作用、抗不安作用を有することから、慢性痛の治療にはうってつけの薬である。薬理作用として、グルタミン酸神経系に対してはグルタミン酸の放出抑制やNMDA受容体のアンタゴニスト作用、またアストロサイトのグルタミン酸トランスポーターの活性化作用、セロトニン(5-HT)神経系に対する作用として、5-HT_{1A}受容体に対するパーシャルアゴニスト作用やアップレギュレーション作用、5-HT_{2A}受容体に対するダウンレギュレーション作用も有する。その他、炎症性メディエーターの産生抑制、グリア細胞の活性化抑制、オレキシンAの分泌抑制、オキシトシンの分泌亢進などの作用も報告されている。

抑肝散は、外科治療の際に使用すると多くのメリットを生むのではないかと我々は考えている。術前からの投与により、手術に対する不安やストレスの緩和、睡眠障害の改善、術中・術後痛の軽減、また術後痛の遷延化抑制、オピオイド使用量の減量やオピオイド鎮痛耐性の抑制等の効果が期待できる。

ただし、万人に抑肝散が使えるのではなく、ストレスによるイライラ、不眠、痙攣を伴うようなケースに用いるとよいとされている。その他、疼痛治療においては、血の巡りが悪くて痛むなら桂枝茯苓丸、浮腫むと痛むまた天気痛に対しては五苓散、痛みが長期化し元気がなく体力をつけたいときには補中益気湯や十全大補湯。また、冷えて痛むなら八味地黄丸や牛車腎気丸、熱をもって腫れている場合は越婢加朮湯、特に泌尿器の場合は猪苓湯などが応用されている。

本講演では、基礎研究の立場から漢方治療の可能性(抑肝散を中心に)を紹介いたします。